

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

今回は、2016年7月27日に仙台教区平賀徹夫司教から発表されました、東日本大震災復興支援「新しい創造」基本計画第4期計画—「寄り添い 共に」—の全文をご紹介します。そして、第4期計画について、仙台教区サポートセンター事務局長 小野寺洋一神父から思いを述べていただきました。また、7月29日、東京で行われた「東日本大震災復興支援仙台教区サポート『拡大』会議」の様子をご紹介します。今回は被災地の視察がなく、会議のみとなりましたが、いつも以上に内容の濃い会議となったようです。最後に、9月のカリタス福岡・熊本支援センターのボランティア受入についてのお知らせがあります。今後とも、皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

東日本大震災復興支援 「新しい創造」基本計画第4期計画 ——「寄り添い 共に」——

カトリック仙台司教区 司教 平賀徹夫

＊2016年7月27日発表

全国の皆さま

はじめに

東日本大震災から5年4か月が過ぎました。これまで日本全国そして全世界から温かいご支援をいただきながら、私たちは被災地・被災者の復興支援活動を続けてまいりました。教会との関係のあるなしにかかわらず駆けつけてくださった多くのボランティアの皆さま、様々な形でのご支援、そして特に、全日本のカトリック教会(三教会管区、男女修道会・宣教会、教会関係の諸事業体・運動体など)の組織を挙げてのご支援に心からの感謝を申し上げます。

仙台教区の復興支援活動は、被災者・被災地の状況に合わせて第1期：2011年3月11日～2011年9月（発災から6か月間の緊急避難所支援）、第2期：2011年10月1日～2013年3月（仮設住宅団地への移行期支援）、第3期：2013年4月～2016年3月（仮設住宅から災害（復興）公営住宅への移行期）として展開してきました。

この間、被災地復興の歩みは、災害（復興）公営住宅建設の遅れに見られるように、行政による計画通りには進んでおらず、被災された方々の生活に大きな格差が生じています。被災された方々の状況は、家族あるいは個人ごとに、あるいは年代によって今後ますます複雑になっていくことでしょう。特に福島県にあっては、福島第一原発の廃炉や事故収束の見通しが立たないことから、対応も難しいままの状況が続くということが懸念されます。

阪神淡路大震災や中越地震でもそうであるように被災地の復興支援は、相当長期に及ぶと考えられます。そこで今後3年間で「新しい創造計画第4期」とし、今後も全国のカトリック教会をはじめ多くの皆様のご理解とご支援をいただきながら東日本大震災で被災された方々に「寄り添い、共にある」活動を展開してまいります。なお、日本カトリック司教団が仙台教区に対する支援を今後さらに5年間延長する決定をしてくださっていることに心から感謝を申し上げます。

計画の期間

第4期計画は、2016年4月1日から2019年3月31日までとします。これは、災害（復興）公営住宅建設が遅れている岩手県の大槌町、山田町での完成予定が2019年3月末となっており、全ての災害（復興）公営住宅が完成する予定であるこの時を一つの区切りとしました。

また、社会・政治・経済などの状況が世界的に流動的です。変化の激しい社会にあって、5年後、10年後の予測はなかなか立てにくいいため、ある程度の見通しができる3年間としました。しかし、神戸市では阪神大震災から20年を過ぎた今なお寄り添いを必要とする人々がおられるように、私たち仙台教区の支援活動もこの第4期計画をもって終了するものとは考えておりません。



2016年3月 岩手県大槌町の様子

計画の基本的な考え方

- 1.当初から掲げてきたように「谷間」に置かれた人々、弱い立場に置かれた人々に目を向け、その人々に寄り添って共に歩みます。
- 2.全国のカトリック教会などからの支援を受けつつも、地元である仙台教区内の小教区が互いに協力し合い、これまでに培ってきた地域の方々との関係を大切にしながら、長期にわたって持続可能な活動の仕組みを作ります。
- 3.被災地自治体をはじめ、社会福祉協議会や関係団体などとの連携を一層深めて地域づくりに貢献するカトリック教会として地域のコミュニティ再生支援を活動の基本に据えます。
- 4.ベース運営では、支援ニーズや支援内容の変化を踏まえた必要な見直しを随時行います。
- 5.仙台教区サポートセンターは、今後も①直轄ベースの運営や事務的なサポート、②ニュースレターなどによる情報の発信、③全カリタスベース、小教区を含めた活動グループの支援活動全体を俯瞰しながら相互の連絡調整などを担当します。

活動の内容

- 1.仮設住宅に残されている人々や災害（復興）公営住宅に移った人々への支援
 - ・災害（復興）公営住宅の建設の進捗状況は地域によって様々で、いまだ仮設住宅に残された人々を忘れることはできません。「お茶っこサロン」の継続により住民が集い、語り合う場を提供し、精神的ダメージのケアを続けていきます。
 - ・災害(復興)公営住宅に移り住んだ人々の新たな地域コミュニティを作っていかなければなりません。これまで培ってきた住民の方々とのつながりを活かしながら、自治会形成のサポート、「お茶っこサロン」などの求めに応じていきます。
 - ・遊び相手が少なく、震災のストレスをかかえた子どもたちへのケアに取り組みます。
- 2.地域コミュニティ再生支援
 - ・ベース内外でのサロン活動やイベント、農業・漁業などの第一次産業の復興支援活動を通して様々な人々が出会い、交流しながら地域コミュニティの活性化、再生につなげていきます。
- 3.福島県での支援
 - ・津波被災だけでなく原発事故による被害を受けた福島県では、補償や放射能等についての考え方の違いによって住民の間に「分断」が生じ、複雑な問題に直面し、傷ついている方々がいます。地域の方々の状況をしっかりと理解し、それぞれにふさわしい支援を行うことが大切です。さらに、今後、避難指示解除によって住民の移動（帰還あるいは自主避難の継続など）の形が多様化するにつれ、新たな支援が必要になると思われます。これまでのベース、小教区、団体の活動経験を活かした支援へとつなげていく必要があります。
 - ・視察や研修を通して、より多くの人々に福島県の現状を広く知ってもらう必要もあります。
- 4.地元ボランティアの発掘

支援活動の中心を担っていただいているボランティアの人数は、年々減少しています。全国の教会管区が2011年の発災直後から被災地に入り、カリタスベースという形で力強い支援をしてくださっていますが、被災した方々に最後まで寄り添い続けることは、地元、仙台教区のひとりひとりの使命です。

これまで様々な事情により、直接の支援活動に関わることができなかった方が、支援の輪に加わり、小さくとも一歩を踏み出せるよう、そしてこれまで精力的に活動続けてきた方々が、今後も支援を続けていけるよう、仙台教区サポートセンターが中心となって支えていきます。



カトリック亙理教会でのお茶っこ（八木山オリーブの会主催）

むすび

教会が東日本大震災からの復興支援に取り組むことは、教皇フランシスコがおっしゃっているような「出向いていく教会」となることとつながります。それは、老若男女だれもができるいつもの祈りから始まります。大震災以来苦しい状況にある人々および支援活動に関わっている人々を祈りの中に包みながら、その方々の上に神の力強い助けが注がれるように願うことからです。今回の震災被災体験を通して、復興支援活動を通して、カトリック教会は、社会のただなかに存在しているもの、その中で生きてこそ教会となっていく、という意識が育ってきていることを実感しています。

これからも、地元の人々、特に谷間に置かれた人々に寄り添い、神の恵みによって皆の思いがつながっていくように共に歩み続けていきたいと思ひます。

「主においてひとつ」－第4期を共に歩む－

仙台教区サポートセンター 小野寺 洋一

2016年7月27日付で、仙台教区の平賀徹夫司教より、東日本大震災復興支援「新しい創造」基本計画第4期計画「寄り添い 共に」が発表されました。これまでの歩みもそうでありましたように、今後もこの基本計画に沿いながら全国の皆さま方のご支援・ご協力のもと、連携して歩み続けていきたいと思っております。

さて、今回の計画の中から、特徴的なことをいくつか取り上げてみたいと思います。

1. 終始一貫した理念「寄り添い 共に」の継続

「新しい創造」基本計画 第1期から掲げている「谷間」に置かれた地域や人々、弱い立場に置かれた人々の心を生き、励まし、つなぎ、支え、寄り添うことを継続的に行っていきます。

震災から年月が経過するにつれ、復興の進捗や被災された方々の状況は、地域によって大きく変化しています。そのような中で、私たちは、仮設住宅へ残された人や震災によって精神的ダメージを受けた方など、今なお、前に進むことができない方のお話を聞き、同じ時間を共にすることで、支援していければと思います。

2. 必要とされる支援内容の変化への柔軟な対応、

および持続可能な活動の取り組み作り

震災から5年以上が経過し、被災された地域および人々の状況は、刻々と変化し、それに伴い、必要とされる支援も変化しています。被災された方々は、仮設住宅から災害(復興)公営住宅などへ徐々に引っ越され、これまで仮設住宅でのお茶っただけでしたが、これからは災害(復興)公営住宅における新たなコミュニティ作りのお手伝いも求められています。また、災害(復興)公営住宅の建物的特徴から、引っ越し後、高齢者を中心に引きこもりになる方がいるため、これまで以上に個別のケアが必要になっています。

そのため、状況の変化を早めに把握し、どのような支援ができるのかを考え、対応していくことが求められます。また、震災発生から5年以上が経過し、確実に遠方からのボランティアが減り、活動している方々も年齢を重ねてきています。

今後、活動を継続していくためには、これまで活動に参加できなかった方にも加わっていただき、多くの方のご協力のもと、地元住民を中心として組織を作り、活発な意見交換などを行い、計画的に持続可能な活動を行っていくことが必要と考えます。



3. 地域のコミュニティ再生支援を中心にした取り組み

東日本大震災により被害を受けた地域においては、家や田畑、仕事などの生活基盤が全て無くなり、地域住民がバラバラになってしまった地域や、震災を機に多くの方が地元を離れ、急速な人口減少が起きている地域があります。また、震災前から過疎・少子高齢化が問題となっていたところに、震災が起これば、問題に拍車がかかってしまった地域もあります。

一方、津波被害の無かった高台やこれまで山林が広がっていた場所では、宅地造成や災害(復興)公営住宅が建設されるなど、新たな町が作られています。

こういったことから、それぞれの地域で、コミュニティの再生や新たなコミュニティ作りが必要となっています。サロン活動やイベントなどで、周辺住民の方が顔を合わす機会を設け、人が出会い、交流しながら地域コミュニティの活性化、再生につなげる活動を行っています。

また、農業・漁業などの第一次産業の支援を通し、交流人口を増やすことで、地域再生の一端を担えればと考えます。



災害公営住宅集会所でのサロン（いわき チーム平・堂根主催）

4. 福島県内での丁寧かつしなやかな支援と情報の発信・共有

津波被災だけでなく原発事故による被害を受けた福島県においては、それぞれの立場によって、多くの考え、問題が存在します。そのため、一人ひとりの状況、考え方などをしっかりと理解し、それぞれの方に合わせて寄り添いながら支援する必要があります。

また、今後、避難指示解除や仮設住宅供与終了に伴い、多くの住民の移動が発生し、新たな支援が様々なところで必要になると考えられます。その際、どのような支援が求められているのか、支援を必要としている人がどこにどのくらいいるのか、本当に必要な支援なのかなど、情報を共有・発信し、「谷間」に置かれた人々、弱い立場に置かれた人々に必要な支援が届くようにしたいと考えます。

また、支援をする側についても、福島の実状をきちんと理解し、支援するつもりが傷つけてしまうことがないように、支援のあり方を学んだ上で、活動していただければと思います。

「新しい創造」基本計画 第3期に向けての平賀司教の言葉に、次のような考えがあります。「日々『キリストと結ばれ、新しく創造された者』として支援活動に携わりながら、支援する側、される側の壁を取り払い、『主においてひとつ』となることができる」。

震災から5年以上が経過し、支援活動も転換期を迎えていますが、仙台教区全体を組み込んだ体制、「我々は主においてひとつ」を改めて確認し、支援活動を行ってくださっている方と支援を必要とされている方が、「主においてひとつ」となり、これからも「谷間」に置かれた人々や弱い立場に置かれた人々がいる限り、継続的に支援活動が続いていくことを望みます。

そして、今後ますます、地元の人々、特に谷間に置かれた人々に寄り添い、神の恵みによって皆の思いがつながっていくことこそが、求められていくのでしょうか。

ニュースレターのメール配信をご希望の方は、お名前などをご記入の上、sdsckoho@gmail.comまでメールをお送りください。次号よりお送りさせていただきます。多くの方に活動状況や被災地の現状を広めていただければ幸いです。

「今さら」ではなく「今から」！
「忘れない」という思いを伝えよう
ー仙台教区サポート「拡大」会議に参加してー

仙台教区サポートセンター 濱山 麻子

7月29日、東京・潮見の日本カトリック会館で「東日本大震災復興支援仙台教区サポート『拡大』会議」が開かれました。カトリック中央協議会の復興支援室が主催し、2011年から毎年一度、全国の教区の担当者を対象に被災地の視察と会議を行ってききましたが、今年は会議のみの開催となりました。全国の司教様、各教区のご担当の方々、中央協議会、カリタスジャパン、そして各カリタスベース、カトリック東京ボランティアセンター（CTVC）、仙台教区サポートセンター（SDSC）の責任者が出席しました。

今回のテーマは「復興支援活動6年目を迎えて」。まずは活動の現状を把握するということで、津波被災沿岸部と福島県のパートに分けて、基調報告とシンポジウムが行われました。



ベースのこれまでの活動を、それぞれ模造紙1枚にまとめて紹介しました。

沿岸部パートでは、カリタス釜石の伊瀬聖子副理事長から「信徒の目から見た支援現場～主にボランティアベースのコーディネートという観点から～」と題して報告があり、その後、宮古・釜石・大船渡・米川・石巻・SDSCから（大槌は都合により欠席）、これまでの活動を振り返りながら、主に「これからどのように活動をしていきたいか」という内容でお話をしました。それぞれのベースの立ち上がり方は様々ですが、いずれのベースもこの5年4か月、「被災した方々のために何かしたい」という思いを持った方々の受け皿となり、ともに活動を続けてきました。「カリタスさん」と呼ばれ、地域の一員として浸透していることは、活動を続ける中での大きな喜びとして、全ベースに共通していると感じました。沿岸部では仮設住宅から災害公営住宅へと住民の方々が移りつつありますが、仮設住宅に残されている方々へ、お茶っこを基本とした支援を続けていくこと、また、これまでに培ってきた住民の方々とのつながりを活かしながら、災害公営住宅でのお茶っこや戸別訪問のほか、例えば大船渡では外国人支援、釜石は街づくりにも今後力を入れていきたいということでした。SDSCからは、全国に向けての情報発信の継続とともに、復興支援を私たちの地域の課題として再認識し、末永く支援活動を続けていくために仙台教区内でのボランティアを発掘していきたいということをお話ししました。

続いて福島県のパートでは、CTVCの漆原比呂志事務局長が「福島をめぐる6年目の状況」として報告しました。未だ原発事故は収束せず、7月19日現在、福島県内外で8万9千人以上の方々が避難生活を送っています。放射能について、帰還について、補償について、など住民間での様々な分断があり、不安と傷を抱えながら暮らしている方々に対して、暮らしの状況に合わせたニーズ対応が求められることが話されました。シンポジウムでは原町ベースともみの木、CTVCから、今後の支援活動の内容と方向性について話されました。原町では、避難指示が解除され、住民の方の帰還を前に庭の整備や片づけ等の屋外活動のニーズが高い状況であり、サロン活動も並行して行っているため、ボランティアの人手はまだ必要とされています。もみの木は仮設住宅での出前カフェを一貫して続けており、行政との関わりや、カトリック教会としてどこまで支援を続けていけばいいのかという悩みを抱えつつも、今後も住民の方々との関わりを続けていくと発表されました。

この午前の部で特に印象的だったのは、『「忘れない」という思いを『行く』という行動で示しましょう』『まずは司祭が、2度目にはその司祭が自分の教会の信徒を連れて、3度目には信徒がさらに他の人を連れて来てほしい』という言葉です。いずれも福島のパートでの言葉でしたが、沿岸部の津波被災地にも、共通する思いだと感じました。震災直後のように、常に大人数の人手が必要とされる仕事は少なくなっているところでも、全国から被災地へ足を運んでいただきたい、ボランティアに来ていただきたいという思いは今も変わりません。それは「今も忘れていません」という思いを直接届けることが、被災した方々の心の支えとなることを、これまでの活動の中で実感しているからだと思います。

午後は参加者全員が所属の管区ごとにグループに分かれ、これからの課題を話し合いました。つながりを作り、支援のお願いや報告会のチャンスを増やしていくこと、福島支援において、行政からとりこぼされている方々の相談を聞き、必要なところへつなぐワンストップ機能が求められていること、視察を積極的に行うことなどが挙げられました。

4月の熊本・大分の地震、昨年の茨城の水害、一昨年の広島の前土砂災害など、自然災害が頻繁に発生している中、東日本大震災の被災地に今も思いを寄せてくださる方々によって私たちは支えられています。深い感謝を感じるとともに、SDSCとして、全国の方々に何が求められているのか、何ができるのか、具体的に伝えていかなければならないことを痛感しました。震災から間もなく5年半が経ちますが、「今さら」ではなく「今からでも」そして「これからも」支援の輪をつなげていきたいと思います。



◆カリタス福岡・熊本支援センター（くまセン）よりお知らせ◆

（2016年8月31日付）

＜9月以降のボランティア受入について＞

熊本地震のためのボランティア活動への参加、ご支援、心より感謝申し上げます。カリタス福岡・熊本支援センター（くまセン）が、活動場所としております西原村及び益城町ボランティアセンターのボランティア受け入れ態勢・スケジュールの変更に伴い、9月のくまセンでの活動（25日まで）は下記のようになります。

◎木・金・土・日

→災害ボランティアセンターを通じての活動と避難所での活動

◎月・火・水→避難所での活動のみ

いずれもボランティアに派遣できる人数に限りがありますので、定員に達した場合はお断りすることもございます。ご了承ください。

また、ボランティアの申し込みは福岡教区ホームページ

（<http://fukuoka.catholic.jp/kjsien.html>）の募集要項をお読みになったうえで、希望日の一週間前までにお申込くださいますよう、ご協力のほどお願いいたします。

＊10月以降のボランティアに関しては、ボランティアセンターでの受入状況が確認できないため、現時点では受け付けておりません。ボランティアセンターからのお知らせを待って状況を判断し、9月下旬頃に改めてお知らせ申し上げます。

今後とも、皆様のご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。